

# 集

俳句フォーラム

2021年10月 第81号



土筆和え

仁上博恵

亡き友の帰郷の心情土筆和え  
春日受け過去から解放靴磨く  
遠近に命の生るる森は初夏  
初夏や希望を乗せて白き雲  
梅雨晴れ間駐車場は満杯に

寺の門

大山夏子

紫陽花に招かれくぐる寺の門  
日替りのマスク憲法記念の日  
花らんまん句座を恋しく思いけり  
柏餅手つかずにあり探し物  
亀鳴くや迷いて名勝庭園へ

雛の日

石川東児

野にあれば空の色して葦かな  
高砂の爺婆飾る雛の日  
新茶酌む遠くて近き緑かな  
五月晴身体己を取り戻し  
卯波寄す駿河の潮路騒がせて

香り

瀬戸美文

辛夷咲くなれど早朝襟立てて  
花に嬉々とオレンジ帽の園児達  
百度石願い届けと八重桜  
甘夏の香る目覚めのコンチェルト  
しみじみと味を楽しむ新茶かな

聖五月

日置瀨魚

もの言える時代の不遜万愚節  
青き踏む住めば都と呟いて  
空元気でも発散したし聖五月  
草餅を頬ばり結論先送り  
歳時記の新刊購ない芽吹きかな



無人駅

渡辺節子

無人駅 一人佇ちたる春日傘  
ジャスミンのひそやかな香り銀座裏  
十葉の花敷き詰める夕闇に  
ふるるものみな浄めたりハナミズキ  
南部風鈴の錆びた音色や亡父想う

都草

中川のぼる

渡るまで  
大輪の牡丹人無き寺の午後  
かるがもの親子が道路渡るまで  
再会や山法師の花仰ぎ見て  
理事幹事事無く果し花菖蒲  
沙羅の花落ちて地上の汚れ知る

枇杷

江口九星

濃紫陽花人は理屈を捏ねたがる  
枇杷の実を挽いで飛びたつ夕鳥  
千年の夢をむさぼる古墳夕焼  
蝶の羽化傘さしかける父と子と  
春雷や闇夜の中をはいまわる

好物

伊藤昌枝

山桜 暗雲はらう峡の村  
聖五月口ダンの地獄の門の前  
笹粽 我が国風の三角に  
忍冬揺るるは雀らの群れて  
好物の理由などなくて心太

緑立つ

吉宇田麻衣

祝福の輪に囲まれて緑立つ  
掘り上げた春筍を茹で上げて  
暗晦を持ち越す先に春の風邪  
早咲きを戸惑いて見る藤の棚  
豆ご飯湯気の香りで見覚めけり

凌霄花

楠本和弘

落雲雀ふと特攻のことどもを  
いにしえ人の古墳で蕨摘みにけり  
噴水の真中零るや凌霄花  
思ふまま水輪とタンゴ水馬  
ふと見たり夕日に透ける蛇の衣

傘

渡部恭子

花に雨傘は形見の男物  
人恋うる時はゆるやか花筏  
春の星バツハのカノン暗譜して  
蔦茂る学舎今も理科が好き  
左脳には解せぬ道理も黒じーる

ミシン

小澤えみ子

すんなりと針穴に糸更衣  
更衣まつすぐ走るミシン針  
白日傘ひと日の想いたたみけり  
カンカン帽ふらりと入る古本屋  
短夜や心許なき薄布団

王手指す

酒井たかお

アスレチックの子らと芽吹きの木々光る  
花萼は星かもしれない夜の空  
青鷺は哲学者かも瞑想す  
ざり蟹捕り泥んこ少年気にもせず  
夏の月理詰め的王手指し切って

コロポックル

由良則子

夢うつつコロポックルと露の傘  
島影の浮いて沈んで臯月波  
三方に屋並みの映る植田かな  
美女柳渋滞の目をなぐさめて  
鱒一尾の釣果下処理喜々とせり

風の香

高畑太朗

花の塵源平絵巻暗誦す  
傘おいて狙うははるか谷若葉  
傘も米も祝わず進め走馬灯  
川床や木漏れ日揺れる八寸に  
異国風味も乙なもの成りかき氷





木の芽和え

平野無石

事のなきひと日暮れゆく木の芽和え  
花つつじ嬉し涙のマスターズ  
逝く命めざめる命木の芽風  
生きること願ためらい梅雨に入る  
苦も楽も楽しみのもと走馬灯

彼岸会

都築繁子

彼岸会や窓にタワ一の見える幸  
老いたれば老たる自由桜餅  
街薄暑渡り切れない青信号  
すつぽりと一人の世界新樹陰  
息災や紫陽花通り逍遥す

麩校

篠田純子

鯉のぼり七尾元気で麩校に  
例大祭のこども歌舞伎やおひねり飛ぶ  
麩校の溝にもふもふ花銀杏  
旧道に櫻糝ふる夕まぐれ  
巢の下に新しき糞つばめ来る

草の生命

田中藤穂

草抜けば草の生命の抵抗す  
小さき鉢大きな百合を咲かせたる  
忙しき一日過ぎて世の青葉  
草を引くときの無心がよいと友  
うちの庭にぼとぼと隣の杏の実

理由もなく

大山夏子

花の寺歩く亡き人傍らに  
空けばすぐ塞がるベンチ薔薇の園  
理由もなく見損なう月食の赤い月  
衣更えとつかえ引替えて眼鏡  
探し物日毎にふえて梅雨に入る